

1. 挨拶 他力による効能

Fさんの誘いで始めたお茶が3年になり人生の深みが増したと思っている。お茶の自然の姿を受け止める心が、日々の犬の散歩で楽しむ景色を広めた。道端、家の軒下、石垣に、今まで見過ごしていたいわゆる雑草達に目が留まり、楚々としたたずまい1cmにも満たない小さな花に、園芸種の華やかさに無い憐れみと力強さを覚える。

社会人として長く歩んできた中で蓄えてきたものは、その時々の仕事、それに関わる人生に必要な度の高いものを優先して得た知識や技術で、退職後の生活に深みを持たせるものは優先度を落とし時間を浪費してきた。その結果今の自分に深みが無いと自覚せざるを得ない。自分の視野を広げる方法の一つは、他者の誘いを受け止めそれを得る時間を作ることが、大きなきっかけになる。今頃気づくとはもったいないことをした。

シニアの会の活動目線を、様々な経験を積んで来られた会員皆の広さとすれば、更に実りある人生が広がると予感している。

2. 今年度の事業について

状況 いよいよ新しい年度が始まりました。5月18日に総会・講演会が開催されました。

講演会は12名の参加のもと盛況に終わることが出来ました。又引き続き開催された対面式総会も無事に終わることが出来ました。今年度も皆様のご協力宜しく願い致します。

事業の実施及び実施予定

定例会（相談会） 4月、5月、は予定通り開催

4月 3日 6日 19日 21日（中止）

5月 8日 11日 24日（中止） 26日（中止）

6月 8日 22日 （企画会議として全体会議予定）

講演会 5月16日（火） 岩手県公会堂

伊藤氏 珈琲 BAL オーナー

コーヒー文化と盛岡

珈琲をキーワードにしての、歴史から盛岡との繋がり、最後に喫茶店の未来についてまで広くお話しいただきました。盛岡にはニューヨークタイムズに取り上げあげられた上田通りのナガサワコーヒー店の他にも、名店が数多く存在している事もわかり、その店を訪ねて、コーヒーの味わいの違いを感じる事の大事さを教わりました。コーヒー



の要素としては「香り」、「苦味」、「コク」、そして「甘味」があり、それぞれ豆の種類や焙煎の仕方等によって、お店独特の味わいがあるとおっしゃっていた。またこれからの方向性として、猫カフェ、ドックカフェや音楽、映画などの癒しと、趣味を掛け合わせたもの、そしてそれに同調する人達の集う場としての存在が強くなっていくと言われていたことが印象的であった。

総会 5月16日（火） 岩手県公会堂
会員総数 24名 出席者 14名 委任状提出者 6名
会則第10条の規定に則り、会員の過半数の以上の参加を認めましたので、本総会は成立しました。

議長の選任 山田副会長が選任されました

議案1 会則の改正について 異議無く承認されました

議案2 令和5年度の役員改選について
事務局長が家庭の事情で今後、会事業への参加が困難になったため、今年度は（）書きとして、当面は会長、副会長、会計の三役で事務局長の役割を分担して運営していく事とする。後任人事は来年の総会で正式に決定する。
事務局長、事務局員の人選は今後三役で進めていく。
上記内容で異議無く承認されました。

議案3 令和4年度事業報告 異議無く承認されました

議案4 令和4年度収支報告 異議無く承認されました

議案5 令和5年度事業計画
補助金に頼らない、会員に特化した事業運営を方針にして進める
全会員を3つにグループ分けして、各グループで企画した会員向け事業を行う
6月8日と6月22日全体会議を開催（一祐会館中会議室）各Gリーダーを決める
7月以降は第2、第4木曜日に一祐会館中会議室を予約しておくので、それぞれのG判断で、会議室使用判断を委ねる
事業の事例は、議案書に掲載してあるが、具他事業は各Gの判断に委ねる
会報は年3回発行する（6月、10月、2月の予定）
ホームページも会報の発行に合わせて更新する
上記内容で異議無く承認されました

議案6 令和5年度収支予算案

異議無く承認されました

会報 11号発行（6月1日に発行） 年3回発行（6月、10月、2月の予定）

3. 会員の移動

退会会員 出戸 秀明さん、清水 健司さんが退会されました

入会会員 なし

4. コラム 『「戸(へ)」の由来について考える』

岩手県から青森県東部のいわゆる旧南部藩領には、「戸(へ)」のつく地名があることは知っているかと思う。盛岡から国道4号線を北上して「一戸町」、「二戸市」、「三戸町」、「五戸町」、「六戸町」、「七戸町」、そこから東に向かって「八戸市」、そして少し南下して「九戸村」である。岩手県には一戸町、二戸市、九戸村が属することになる。このように「〇〇戸」とは何に由来するのか？「四戸」はどうなったのか？「一戸」の隣はなぜ「九戸」なの？等のミステリーをひも解いていこう。



【戸の由来】

まずは基本的な事柄をまとめてみる。岩手県と青森県にまたがる「一戸」から「九戸」までの地域をかつては「糠部地方(ぬかのぶちほう)」と呼ばれていた。「戸」の文字を含む地名は珍しくないし、「戸」に数字を冠した地名もたまに見られるが、「一」～「九」までが出そろったケースは全国でもここだけである。一体この整然とした連続地名は何を意味しているのだろうか。古来多くの人々がこのテーマに挑んできたが、その真相はいまだに明らかになっていないという、歴史ミステリーの一つである。そこで有力な説をいくつか紹介したい。

- ① 南部氏の「九牧」に由来するという説 中世に「糠部(ぬかのぶ)地方」に入部した南部氏は馬産に力を注ぎ、「九牧」とよばれる牧場を設置した。まさに九か所で、当時南部領内固有のものであるから、「一戸」～「九戸」はこれらの牧場に由来するのではないかというのである。しかし、「一戸」～「九戸」は南部氏の糠部入部以前から既に存在した節があるようだ。さらには「九枚」の位置も、青森の大間が含まれていて、九つの「戸」の位置と合致していない場所がいくつかある。従って、「九牧」説の可能性は低いと考えられる。
- ② 「貢馬(こうば)」の「幣(へ)」にかかわるという説 「一戸」～「九戸」が古くから名馬の産地であったことは確かである。『へ』は『幣(ぬき)神への貢ぎ物の意味』の意味で用いる場合がある。猿楽の小謡に「一の幣(へ)立て、・・・」というものがある、これは古代の駒牽き(馬を引いて連れてゆくこと)を詠んだものであろう。《一の幣立て》とは《一戸で育てる》という意味で、ここでの《立て》は産地を意味したものと考えるのが妥当であろう。古代の清原氏や奥州藤原氏の時代から糠部駿馬を都に献上する「貢馬」とのかかわりの可能性である。

- ③ 「貢馬置牧」制度、または「九ヶ部四門の制」にかかわる広域行政区域として設定されたという説 現状では最も有力な説とみられている。十一世紀末の清原氏から十二世紀の奥州藤原氏の時代に設定されたようだ。「九ヶ部四門の制」は一の部（戸）から九の部（戸）までの各部にひとつずつの牧場と七つずつの村を置き、九ヶ部六十三村が協力して軍馬を育て、貢馬（献上馬）を納めるようにした制度である。また四門とは、一部（戸）～九部（戸）がほかの一國に匹敵するほど広がったため、東西南北の四つの「門」に割り振ったものと解釈された。この「門」はゲートではなくエリアを示すとされ、「南門」に「一戸」と「二戸」、「西門」に「三戸」「四戸」「五戸」、「北門」に「六戸」「七戸」、「東門」に「八戸」「九戸」を振り分けたという説である。この九ヶ部四門の制の起源そのものは定かではないようだが、少なくとも鎌倉時代初期には存在していた事は明らからしい。すなわちそれ以前に糠部地方の「戸」地名が成立していて、これが中世の馬産地名や置牧制度整備に踏襲されたようだ。
- ④ 糠部開拓経営のためのエリア区分に由来するという説 大和朝廷勢力が、この地方一帯を開発経営するための方策として、政治的目的をもって命名したという説である。坂上田村麻呂の後の征夷大將軍である文室綿麻呂（ぶんやのわたまる）の頃との説が有力である。この一帯は当時もまだ「蝦夷（えみし）国」であった。すなわちこの地域一帯は、大和朝廷にとっては「権力の空白地域」であったのである。その際、広大で地形も複雑なこの地域全般を経営する観点から、簡便的に「一の地方（一戸）」、「二の地方（二戸）」といった区分をしたという説である。この説には史料的根拠はないが、ありえそうな説の一つである。

以上の様に、「戸」の由来についてはいろいろな説があり、そのどれもが興味深い話とつながっているようだ。現時点で最も有力なのは③の「貢馬置牧」制度、または「九ヶ部四門の制」にかかわる広域行政区域として設定されたという説である。いずれにしても馬を年貢として納めるための個別経営体として設置された「馬戸（うまへ）」の集落が「一戸」、「二戸」等に移行していったものようだ。

【「四戸」は怎么样了か？】

正平21年（1366年）の日付がある、「四戸八幡宮神役帳（しんやくちょう）」には、「一戸」から「九戸」までの全ての地名が記載されている。すなわち「四戸」も存在していたことになる。かつて八戸市西部に位置していた「櫛引八幡宮（くしびきはちまんぐう）」は「四戸八幡宮」と呼ばれ、この地域を支配していた櫛引氏が「四戸殿」と呼ばれていた。そのため櫛引八幡宮周辺や旧福地村（現南部町）、旧南郷村（現八戸市）の一帯が「四戸」だったようだ。ではなぜ「四戸」が消えてしまったのだろうか？「四戸」の四（し）が

「死」に通じて縁起が悪いためとの説もあるようだが、本当だろうか？かつて「四戸」を支配していた櫛引氏は、「九戸の乱」で滅亡してしまったようだ。これに伴い、「四戸」の領地も諸氏の所領として分割されてしまった。これにより「四戸」という地名も消滅してしまったと考えるのが有力である。しかし「四戸」という苗字は残っていて、現在も四戸さんという方多くいると聞く。

【なぜ「一戸」の隣が「九戸」なんだろう？】

地図を見ると「一戸」から始まり、北上して陸奥湾近くの「七戸」がある。なぜかそこからUターンして「八戸」「九戸」と続いている。そのため「一戸」と「九戸」が隣り合わせになっているように見える。なぜ？という疑問が湧いてくる。この謎を解くためには当時の交通事情を考慮しなければならない。「一戸」から「七戸」までは街道が通っていた。当時の奥州街道である（現在の国道4号線）。この街道沿いと沿岸地域とは険しい山並みに遮られていて、「八戸」へは「四戸」から分岐していかなければならなかった。また、「一戸」や「二戸」から「九戸」に行くには小倉岳や折爪岳を超えなければならず、かなりの難所だったと考えられる。また、馬の産地を表す「戸立ち」という言葉があるが、「一戸立ち」から「七戸立ち」までは、「吾妻鑑」等の文献に記述があるが、「八戸立ち」や「九戸立ち」という言葉は出てきていないことから、まず「一戸」から「七戸」までが最初に構築され、その後「八戸」、「九戸」が追加で建てられたためにこのような配置になったものと考えられたようだ。

このように、今回は地名にまつわる歴史ミステリーをひも解いてみた。東北にはまだまだ解明できない歴史ミステリーが数多く存在している事は言うまでもない。歴史好きの方には持ってこいの場所である。読者諸兄におかれても、独自の視点でこれらミステリー一の謎解きの旅に出かけるのも一興かと思う。

5. 新たな会員の募集について

新規会員の紹介をお願い致します。会員増は会員の皆様の人脈日よりです。

本会報を使っても構いませんので、お知り合いの方へのお声かけお願いいたします。

連絡先 事務局 志田満

携帯 090-2791-1803 e-mail mitshida.1029@docomonet.jp

6. 編集後記 「遠野高校の宮沢賢治像」について 岩手日報 2月5日版より

遠野高校には宮沢賢治のブロンズ像があるそうだ。しかし一般的に知られている宮沢賢治とは似ていなくて、遠野高校でも宮沢賢治と認識していない生徒もいるようだ。この要因は、賢治が病床にあった時の写真を見本としたためで、当時実弟の清六をはじめ、関係者は、似ていようが、似ていまいが「賢治」の精神を感じると言っている。身近に古里の偉大な先人を感じることができるのはうらやましい限りである。（志田）